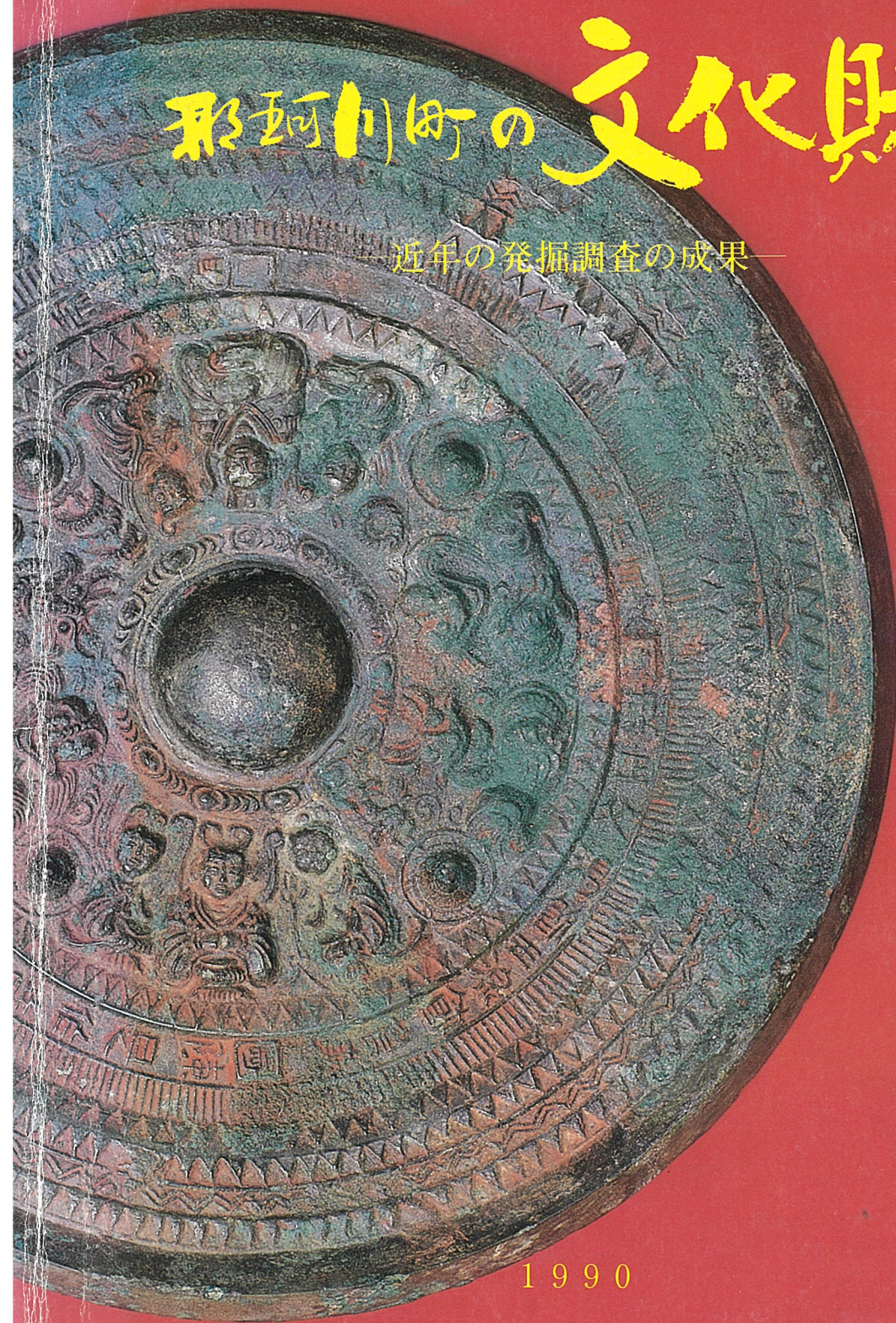


那珂川町の文化財

—近年の発掘調査の成果—



1990

那珂川町教育委員会

は じ め に

那珂川町は豊かな自然に恵まれ、その豊かな自然を享受しながら、古より人々が生活し、文化を育んできた史跡の豊かな処でもあります。北方に玄界灘を望み、南の山々の峰に肥前国との境を持つ本町の位置は古代から重要な要衝であり、そこに残された数々の文化財は、北部九州全体の歴史の中に位置付けられるほど価値の高いものです。

この縁と歴史豊かな那珂川町にも開発の波は押し寄せ、開発に伴う遺跡の発掘調査は年々その数を増してきています。那珂川町教育委員会では随時発掘調査に当たってきましたが、本教育委員会が事業主体となり発掘調査を実施するようになって10年が過ぎました。各位のご理解とご協力により様々な発掘調査の成果が上がってきており、本町の古代から中世にいたる歴史の一端が明らかにされようとしています。また、出土品を見ても第一級のものも多く、青銅鏡や割竹形木棺等は全国的にみても希少な発見です。

今回、こういった町内から出土した出土品や調査した遺跡の概要をまとめ、利用者の方々の便宜をお図りしようと本書を刊行することになりました。本書が町の歴史や文化財の保護に対する理解を助け、更なる文化財保護行政推進の礎^{いしずえ}にならんことを願っております。

最後になりましたが、貴重な文化遺産を保護するため、ご理解とご協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げます。

那珂川町教育委員会

教育長 富田正幸

- 本書は近年の発掘調査の成果を出土品と遺跡の概要とでまとめたものである
- 本書の作成は澤田康夫、佐藤昭則、茂和敏、宮原千佳子で行った
- 執筆・編集は澤田、宮原がたった
- 写真は岡紀久夫の撮影による
- イラストは宮原が作成した
- カラー写真のうち、複数の集合写真については別に解説をもうけた

那珂川町のあけぼの

那珂川町では遅くとも約2万年前の石器時代には人が住んでいたと思われ、その頃の石器が深原・平蔵・井河・松木などの各遺跡から出土しています。

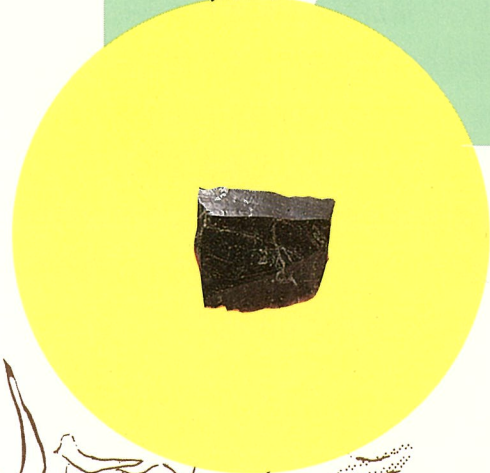


▲ナイフ形石器（井河遺跡）

使用例



装着状態



◀台形石器（平蔵遺跡）



イラスト
石器時代の狩りのようす（想像図）



▲石器（松木、平蔵遺跡） 解説 P17

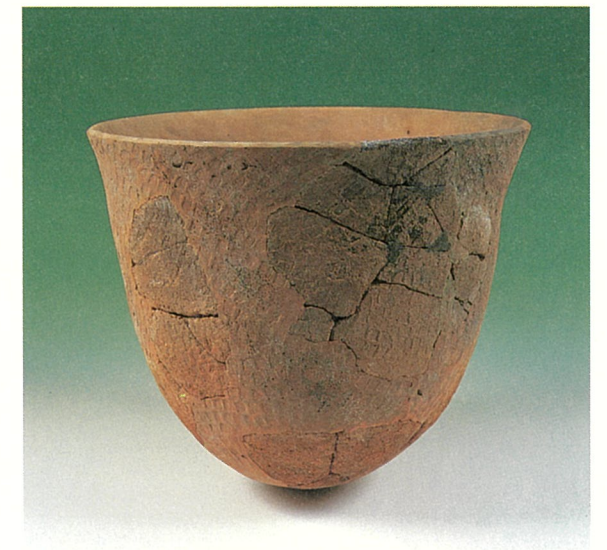
土器の発見

ー縄文時代ー

石器しか知らなかった人々は焚火のそばの土が火を受けて堅くなっているのを見たりして、土器を作ることを見出しました。土器を作ることにより、食事にも新たに煮炊きが加わり、より多彩になりました。今からおよそ1万～8千年前のことです。



◀縄文晩期の小鉢（観音堂遺跡） 高さ 8 cm



▲縄文早期の押型文土器（深原遺跡） 高さ25cm



▲10,000～8,000年前頃の土器

縄文土器の移り変わり

縄文土器は約8千年の長い時間の間にも少しずつ変化しています。前期の土器は表面に型を押して文様をつけたものが多く、中期は出土例が少ないものの、装飾が盛んに行われ、後期になると文様がつかない簡素なものが多くなります。3枚の写真は町内から出土した土器片です。



▲3,000年前頃の土器



▲2,200年前頃の土器

海を渡ってきた文化

—弥生時代—

猟や採集で生活してきた縄文人に大きな食生活の変化がありました。今から約2200年ほど前、大陸から海を越えてきた人々が伝えた「コメ」を栽培するようになったのです。海を渡ってきた人々は「コメ」の他にもいろんな道具や技術を伝えました。

「コメ」とそれを栽培する技術によって、人々の食糧は安定していききましたが、それと同時に、「コメ」を作る土地と人間を奪い合って、争いが、たびたび起こるようになりました。より強い集団が弱い集団を征服し、それらがだんだん大きくなって「クニ」を形づくるようになっていきます。



▲銅矛 安徳字原田から出土した（前原町蔵）



▲石包丁 稲穂を摘む道具（安徳、宗石遺跡）
左上10cm



▲鉄鎌 鉄器が収穫を大きくのばした（安徳遺跡）
長さ15cm

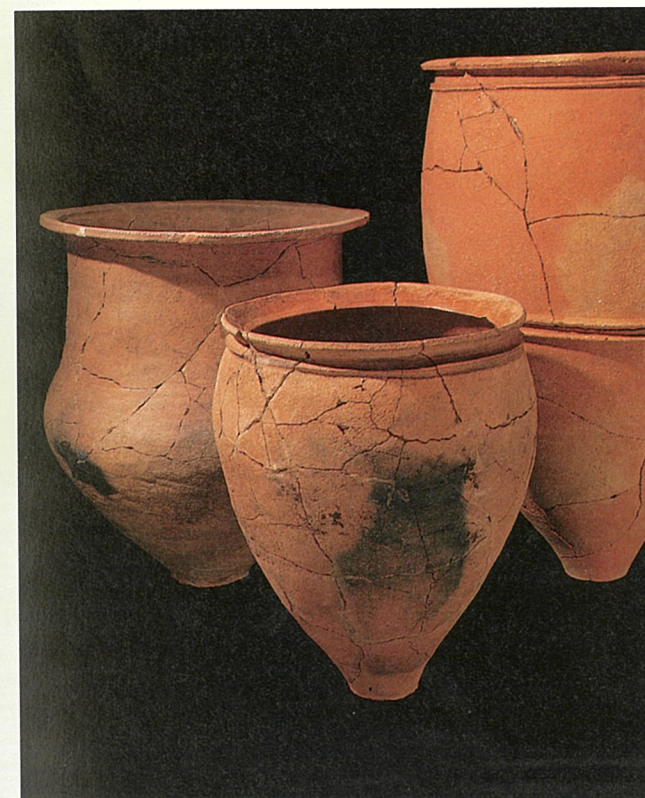


▲石斧 旧石器時代以来の石斧も使われた
解説 P17

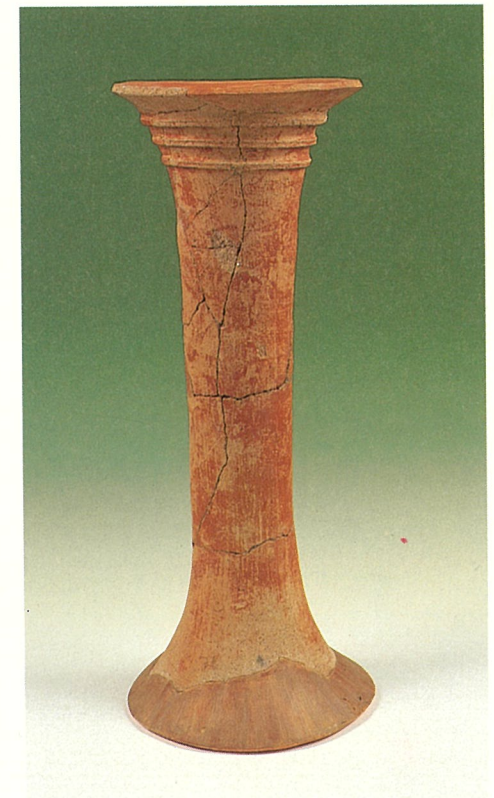
土 器 —弥生時代—



▲弥生時代に使われたいろんな形の土器 解説 P17



▲甕棺 死者を埋葬するのに使った。時期により形がちがう
（左は前期、右が中期、中央は後期で、高さ70cm）



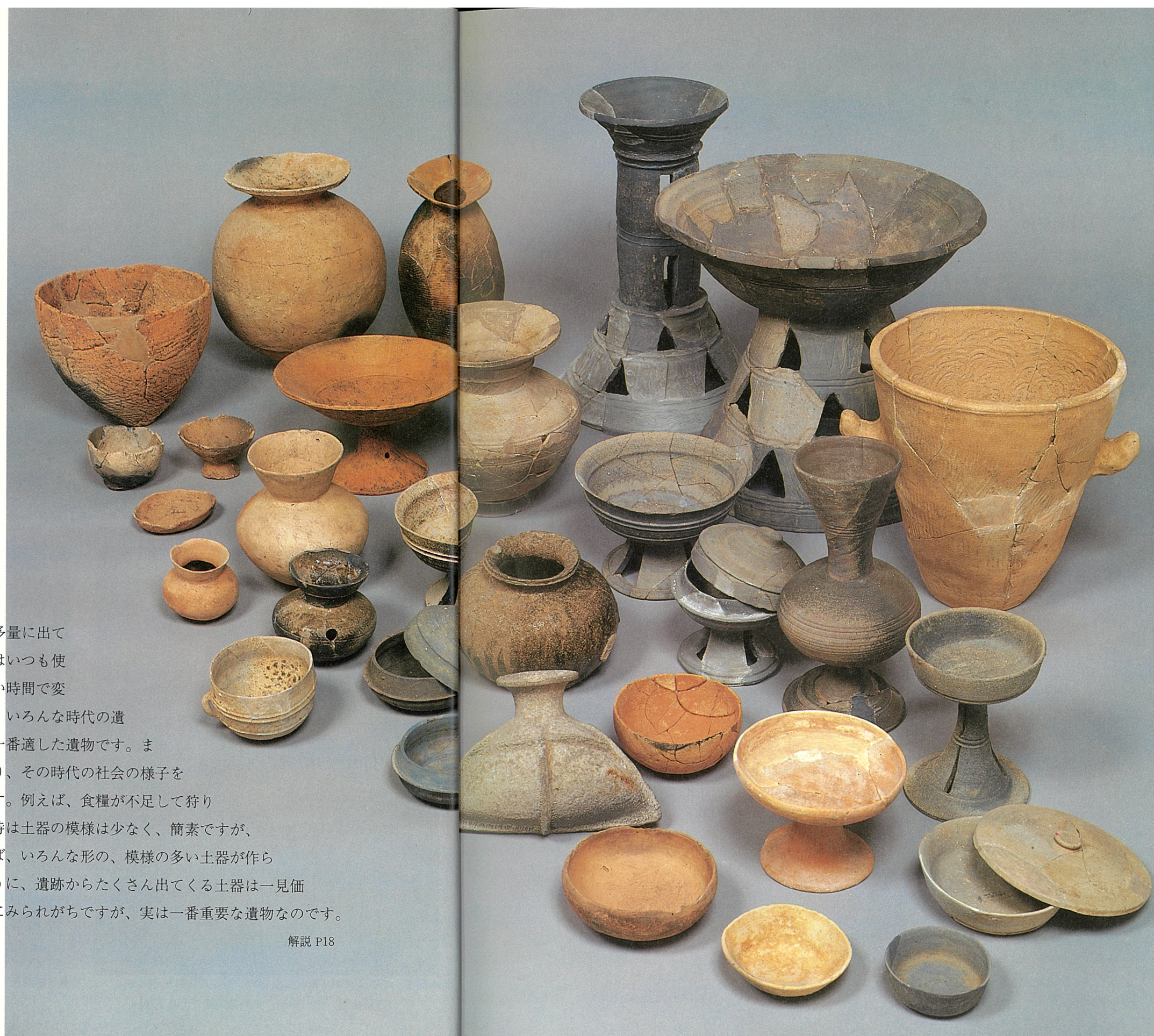
▲筒形器台 祭りに使ったもの（安徳遺跡）
高さ60cm

土 器

—古墳時代—

遺跡の発掘調査で一番多量に出てくるのは土器です。土器はいつも使うので、壊れやすく、短い時間で変わっていきます。従って、いろんな時代の遺跡の年代を推定するには一番適した遺物です。また、土器を見ることにより、その時代の社会の様子をかいまみることもあります。例えば、食糧が不足して狩りや採集に一生懸命の時は土器の模様は少なく、簡素ですが、逆にゆとりがあれば、いろんな形の、模様の多い土器が作られます。このように、遺跡からたくさん出てくる土器は一見価値がないようにみられがちですが、実は一番重要な遺物なのです。

解説 P18



権威のシンボル

古墳時代になると権力は特定の集団や個人に集中するようになり、一人の王のために膨大な人員を動員して巨大な古墳を造るほどになりました。那珂川町でも安徳大塚古墳や貝徳寺古墳のような大きな前方後円墳が造られています。このような王の墓にのみ、その権威のシンボルとして副葬されたのが青銅鏡を初めとする宝物です。また、自分の身長の数倍以上もある棺を造ったのも権威を民衆に示すものでした。写真の木棺は普通は腐って無くなるのに、実物が残っていた唯一のもので、全国的にも貴重なものです。



▼四獸形鏡（エゲ古墳） 径13cm



▲割竹形木棺（後野字大万寺裏出土）
長さ3.6m、巾42cm



▼三角縁神獸鏡（妙法寺2号墳）
径22cm

▶ 形象埴輪―馬・家（カクチガ浦10号墳）
古墳の頂上から出土した。馬の高さ65cm



◀ 蓋（貝徳寺古墳） 高さ46cm

埴輪（はにわ）

埴輪には、当時の人々が使っていた道具類、住んでいた家、動物、人物など形を表した形象埴輪と、古墳の回りに垣根のように巡らす筒状の円筒埴輪とがあります。この形象埴輪は当時の家の作りや、使っていた道具などを教えてくれるのと同時に、服装や入れ墨、身につけた装飾品、日常生活の仕草など、当時の生活や習慣を具体的に私達に教えてくれます。那珂川町では貝徳寺古墳、カクチガ浦10号墳、安徳大塚古墳から埴輪が出土しています。



▲ 形象埴輪―人物・家・壺（貝徳寺古墳） 家の高さ45cm



▲ 円筒埴輪（貝徳寺古墳） 右端高さ40cm

身を飾る

—古墳の副葬品—

古墳には死者が生前使っていたものが一緒に埋葬されます。これらの副葬品により、当時の生活の様子を知ることができますし、また、出土した場所を正確に調査することで、当時の人々の死に対する考え方や、葬送の儀式のやり方など、精神的なものにまで迫ることが可能です。



▲装身具のかずかず 身を飾るとともに身分を現わす象徴でもあった 解説 P18

戦い

—古墳時代の武器—

古墳時代は弥生時代に引き続いて戦乱の時代ですので、武器は必要不可欠のものだったでしょう。武器が重要視された証拠に、古墳にはどんな小さな古墳にも必ずといっていいほど武器が副葬されています。武器としては、このページの写真の他に、盾・弓・鎧などがありますが、本町からはまだ出土例がありません。



▲鉄剣（井河1号墳・エゲ古墳）左端は長さ53cm



▲鉄鏝（カクチガ浦古墳群） 右端は長さ19cm



▲直刀（井河1号墳・平蔵1号墳・カクチガ浦2号墳）
左端は長さ88cm

物を作る

—古墳時代の道具—

古墳時代になるといろんな技術が急激に進歩しました。工具の中には現在、私達が使っているノコやキリなどもみられます。



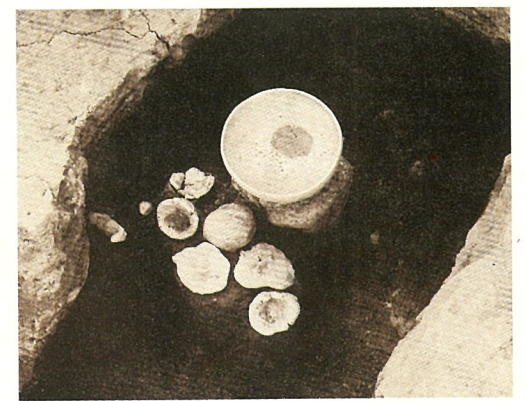
▲古墳時代のいろいろな工具 柄に使った木や鹿角が残るものもある 解説 P18

まつり



▲「まつり」に使われたさまざまな模造品 解説 P18

発掘調査では、よく「まつり」の行われた痕跡が見つかります。それは、お墓の回りだったり、住居のカマドの中であったり、自分達の生活に密着した所で多く行われています。自然や死に対する恐れから「まつり」は始まったのでしょうか。古墳時代になると、この「まつり」は古墳の上で権力の継承の儀式として行われ、政治的な色彩を強めてきます。



▲カマド内の「まつり」のようす (松木遺跡)

歴史を織りなす

－中世的那珂川町－

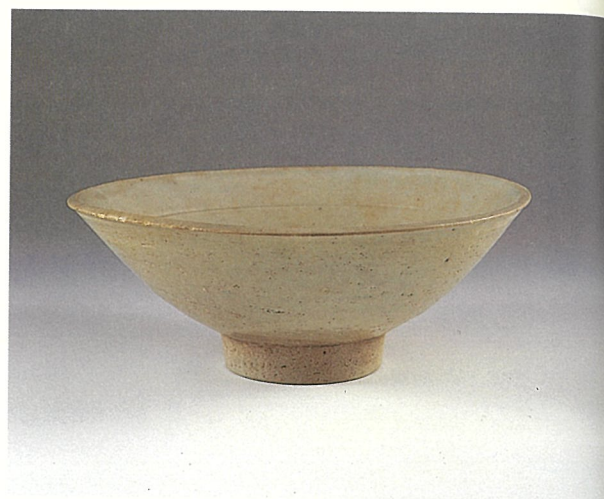
那珂川町では古墳時代以後の遺跡は調査例が少なく、よく分かっていませんが、平蔵遺跡や下梶原前遺跡の発掘調査の結果では、梶原一帯は、少なくとも飛鳥時代から製鉄関係の工人達が鉄を作っていたことが分かっています。この他、町内各地で木棺墓や溝が見つかり、当時の集落は、現在の集落の地下に埋もれているものと想定されます。また、本町には中世の山城が多く残りますが、それらの実態についてはこれからの調査によって明らかにされていくでしょう。



▲土がま（平蔵遺跡） 高さ18cm



▲こね鉢（平蔵遺跡） 口径41cm



▲白磁（宗石遺跡） 口径18cm



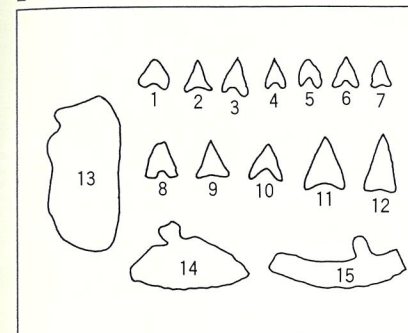
▲青磁 エゲ古墳近くの木棺墓から出土した 口径16cm



▲土師器の坏（平蔵遺跡） 後方中央は口径13cm

写真の解説

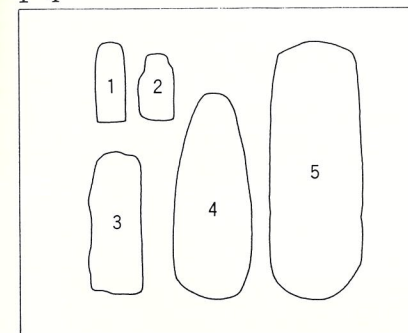
P 2



P 2 石 器

1～12は松木遺跡から出土した縄文時代の石鏃。石鏃は矢の先につけて用いる小型の石器で、石材は黒曜石やサヌカイトが使われる。7は1.4cm、12は2.9cm。弓矢は逃げ足の速い動物を、遠くからでも射とめることができる狩りの道具で、縄文時代に発明されている。13～15は石じまたは石さじといわれるもので、動物の皮などをはぐのに使う道具。13・14が平蔵遺跡、15が観音山古墳群から出土。全てサヌカイト製で、14の刃の長さは7.4cm。どれもつまみ部分が付いている。

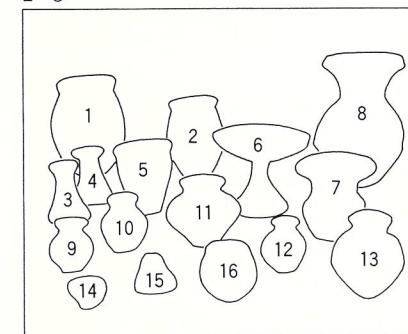
P 4



P 4 石 斧

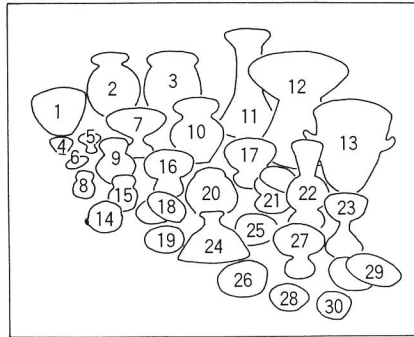
1～5は弥生時代の磨製石斧。1・2は頁岩質の石材を用いた扁平片刃石斧で、3は柱状片刃石斧で、刃先を欠く。4・5は太型蛤刃石斧。4が松木遺跡から出土したほかは観音山古墳群から出土した。扁平片刃石斧は、仕上げ削りに使うもので、カンナの刃のように形が整っている。太型蛤刃石斧は、木を打ち倒したり、粗割りする斧。4は玄武岩製で、長さ14cm、重量318g。柱状片刃石斧は、木を粗く削り、深くえぐるための斧。いずれも木の柄に装着して使用する。

P 5



P 5 弥生時代の土器

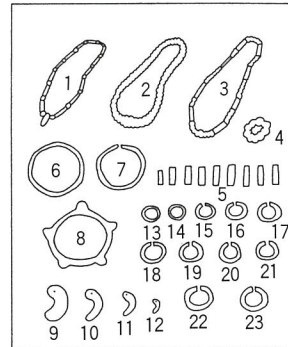
弥生時代（2200～1800年前）に作られたさまざまな土器。5・9～14・16は前期の土器。5は煮炊きに使った甕、9～13・16は貯蔵用の小型の壺、14は小鉢。11は口径12cm、高さ18cm。7は中期の終わり頃の壺。鋤先状の口縁が特徴で、高さ22cm。6・8は後期の土器で、6は食べ物を盛る高坏、8は壺。1～4・15は終末期の土器。1・2は煮炊き用の甕で1は口径20.2cm、高さ34.3cm。3・4・15は甕を下からささえる支脚。1～4・7・15は安徳遺跡、6・8は宗石遺跡、9・11は松木遺跡、他はカクチガ浦遺跡から出土。



P 6～7 古墳時代の土器

古墳時代の土師器（1～9・25～28）と須恵器（10～24・29・30）。奥から順に時期が新しくなる。器形は壺（2・3・8～10・20）、長頸壺（22）、こしき（1・13）、器台（11・12）、坏（4・6・18・19・28～30）、高坏（7・16・17・23・27）、有蓋高坏（21）、台付小鉢（5）、ジョッキ型土器（14）、甗（15）、皮袋型提瓶（24）、マリ（25）、椀（26）などがある。1・8は宗石遺跡、2～7・9・21～24・26は松木遺跡、11・12は貝徳寺古墳、13は合政遺跡、10・14～16・18～20・25・28はカクチガ浦古墳群、17は井河古墳群、他は平蔵遺跡出土。

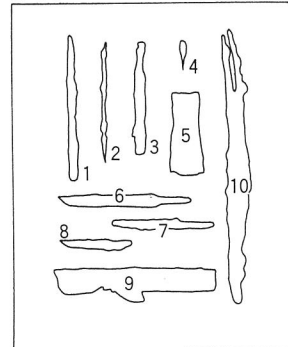
P12



P12 身を飾る

古墳時代のさまざまな装飾品。1～3は宝石やガラス製の玉類で作った首飾り。1の勾玉はメノウ、2はガラス製。4は水晶玉、5は碧玉製の管玉。6～8は青銅製の腕輪。8は5個の鈴が付く珍しいもので鈴釧という。9～12は勾玉。13～23は耳飾り。1・2・6・8は井河古墳群、3・15・16・18・19はカクチガ浦古墳群、12はエゲ古墳、9・10は宗石遺跡、他は観音山古墳群出土。8の外径は7.36cm。

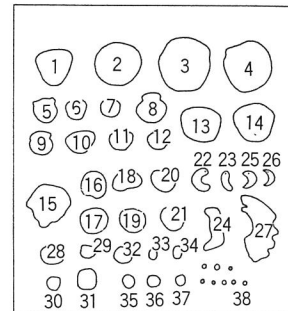
P14



P14 工 具

古墳時代の鉄製工具。1・2はヤリガンナで木材の表面を平滑に仕上げるのに用いる木工具。3はノミ、4はキリ、5は斧。6～8は刀子、今でいうナイフのこと。8には鹿角製の把の一部が残る。9は両辺に二等辺三角形の刃が刻まれているノコギリ、10はものを挟む工具で鉗子という。1は妙法寺古墳、2・4・5・9はエゲ古墳、3・6～8・10はカクチガ浦古墳群出土。9の長さは27cm。

P15



P15 まつり

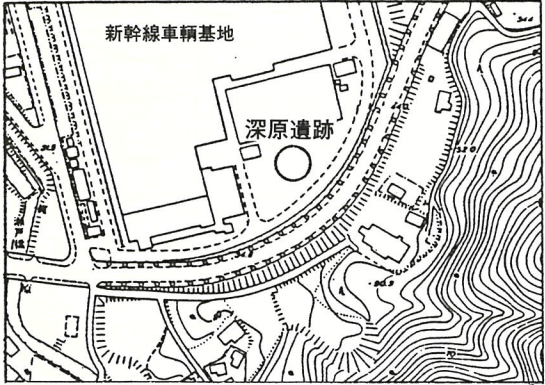
1～14は壺や椀をまねたミニチュアの土器で、1は高さ4.2cm。15～21は鏡をまねた土製品。22～26は勾玉をまねた土製品。27は滑石製の勾玉にこぶが付いているような形で、子持勾玉という。28～31は滑石製の有孔円盤。32～37は土玉。38は滑石製の白玉。1～15・18～24・32・34・36は松木遺跡、他は井河遺跡、28～31は今光遺跡出土。

近年発掘調査した主な遺跡

深原遺跡（ふかばるいせき）

時期 縄文時代早期

所在地 那珂川町中原字深原



新幹線車両基地の建設に伴って調査され、石組の炉跡32基を発見しました。炉跡があるということは当然、住居があると考えられますが、炉跡の回りでは残念ながら住居の跡を示す痕跡は発見できませんでした。この石組の炉跡のある一帯からたくさんの石器や土器が出土し、人々が生活した集落があったことが伺えます。炉跡の配置からみて、3ヶ所に分かれて、それぞれ10軒ずつほどの住居があったようです。出土した石器は矢の先に付ける石鏃を初め、木を切ったりする石斧、動物の皮を剥ぐための石匙などがあり、土器は表面にいろんな型を押した押型文土器と呼ばれるもので、人々が土器を作り始めた最初の頃の特徴を示すものです。人々が最初に土器を作り始めたのは8千年前とも1万年前ともいわれていますが、その頃の那珂川町に住んでいた人々の生活を知る上で貴重な資料となりました。

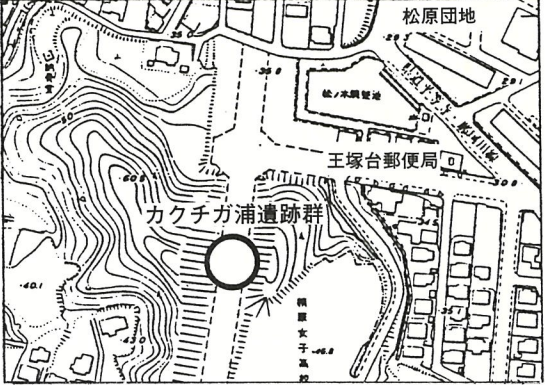


炉跡

カクチガ浦遺跡群（かくちがうらいせきぐん）

時期 弥生時代前期

所在地 那珂川町松木字カクチガ浦



カクチガ浦遺跡群は都市計画街路・今光～下梶原線の建設に先だって調査したものです。ほぼ、南北に伸びる尾根の上に弥生時代の住居址5軒と穀物を貯蔵しておいたと思われる貯蔵穴12基、土壙多数を検出しました。いずれも、出てきた土器から弥生時代前期（約2200年前）のものと分かりました。住居址は10～20㎡ほどの広さがあり、円形のものや四角のものがあります。貯蔵穴は、深さが3 m前後もある深いものです。中からは穀物を入れておいたと思われる壺が、ほぼ完全な形で数個出てきました。

那珂川町では、この時期の集落の調査例はほとんどなく、わずかに、松木遺跡で円形の住居址が1軒確認されているだけで、それも残存状態が余り良くなく、住居の様子などよく分かっていませんでしたが、この調査はこの空白を埋める好資料を提供してくれました。

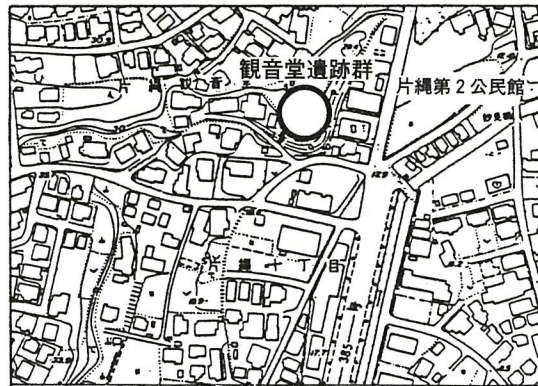


住居跡

観音堂遺跡群 (かんのんどういせきぐん)

時期 弥生時代中期

所在地 那珂川町片縄字観音堂



宅地造成がされるということで、事前に行った調査です。国道385号線によって削られた丘陵の残りの西斜面に遺跡は営まれ、甕棺69基を発見しました。甕棺の形式から弥生時代中期（約2000年前）のもので、副葬品としては銅鏃、石剣が出土しました。甕棺は2つの甕の口と口を合わせ、その合わせ目を粘土でふさぎ、密封した状態で埋められていたものが多くあり、中の人骨がよく残っていました。この人骨から当時の人々の身長や顔立ち、性別、死亡した年齢などがわかりますが、本遺跡の弥生人は「渡来系」の北部九州人によく似ているものの、身長が166cmと周囲に比べ、特別背の高い人々だったと、分析に当たった九州大学の解剖学教室から報告がありました。同じ時期の甕棺墓地は、この遺跡の他にもあり、宗石遺跡で約120基ほどが調査されています。



甕棺墓群

安徳遺跡群 (あんとかいせきぐん)

時期 弥生時代後期

所在地 那珂川町安徳字原田



安徳遺跡群は、現在の安徳の集落一帯の地下に埋もれている遺跡群です。その一角にライスセンターができることになり、急きょ事前の発掘調査を行いました。調査した面積が狭く、不明な点が多いのですが柱穴多数、大溝3本を検出し、石包丁や石斧、土器類などが出土しました。

注目すべき成果として、弥生時代後期に掘られた溝が見つかり、この溝の上層で「祭り」が行われた跡を検出できたことがあげられます。このことは、弥生時代の後期（約1700年前）に付近に大きな集落のあったことを伺わせますし、近くから銅鏃12本が出土したことを考え併せると、非常に重要な遺跡がこの一帯に埋もれている可能性が大きくなったといえます。安徳から五郎丸にかけての微高地や安徳台には、本町で最も重要な遺跡が埋もれていると考えられ、今回の調査で、その一端を確認できたのは大きな成果でした。

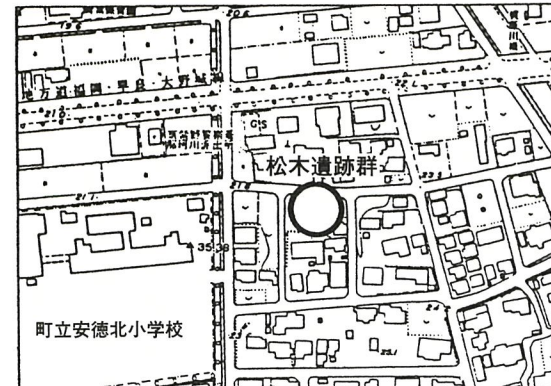


遺跡全景

松木遺跡群 (まつのきいせきぐん)

時期 古墳時代前期

所在地 那珂川町松木字瀬戸口他



この遺跡群は一帯の区画整理事業に先だって発掘調査を行いました。古墳時代の住居址を50軒ほど検出し、当時このあたりに大きな村のあったことがわかりました。住居址は四角のもので、20～30㎡の広さがあり、中央に炉跡がありますが、新しい時期のものになると壁際にカマドを作り付けています。カマドの中には土製の勾玉や鏡、玉などを置き、火の神を祭った跡を残すものもあり、当時の信仰の様子を知る手がかりとなりました。ここから出土した土器には、地元で作られていた土器に混じって、畿内や瀬戸内地方、山陰地方の土器も混ざっており、当時の人々の交流の様子がうかがえます。また、陶質土器や古い須恵器も出土し、須恵器が伝えられた年代を、それまでよりもっと古く考える資料となりました。これらの土器群は学問的に高い評価を受けています。



住居跡

妙法寺古墳群 (みょうほうじこふんぐん)

時期 古墳時代前期

所在地 那珂川町恵子字妙法寺



町民体育館の建設に先だって、調査を行いました。前方後方墳と方形周溝墓を1基ずつ調査しましたが、前方後方墳の後方部中心にあった木棺の痕跡の中からは、三角縁神獣鏡という貴重な銅鏡が出土し、注目を集めました。古墳は全長18mの小さなものですが、古墳の形を造る周溝が、前方部まで周りきらない特殊な形をしています。このような形の古墳は山陰地方にもみられ、それらとの関係も興味あることです。

ところで、この調査が終わって造成が始まりましたが、南側の斜面から木棺が見つかりました。それまでは痕跡しか残っていなかったものが、棺そのものが出てきたのです。水分を含んだ粘土の層に密封されていたので、1600年もの間、腐らずに残ったと思われます。この木棺は、その形状から割竹形木棺と呼ばれるもので、この種の木棺で残りの良好なものは日本でもこれだけでしょう。



妙法寺2号墳

エゲ古墳 (えげこふん)

時期 古墳時代前期

所在地 那珂川町松木字エゲ



エゲ古墳は都市計画道路建設に先だって調査しました。古墳は平野と接する丘陵の先端にあり、非常に見晴らしの良い所に作られています。古墳は1辺が18mの方墳で、地表を削って形を整えた上に土を盛って造っているため、平野部から見上げると2段のピラミッドのように見えます。古墳の中央には割竹形の木棺が埋葬されていたらしく、棺はすでに腐ってなくなりましたが、それをおおっていた粘土に棺の痕跡が残っています。棺内からは青銅鏡を初めとして剣、鋸や斧、勾玉などが供えられたままの状態で見つかりました。これだけの出土品がほぼ完全な状態で見つかることはまれで貴重な成果となりました。

古墳の北側では2基の方形周溝墓を検出しました。いずれも古墳と同時期につくられたとされるもので、このような古墳と方形周溝墓の組み合わせは古墳時代前期の有力古墳に多く見られます。



エゲ古墳

井河古墳群 (いごうこふんぐん)

時期 古墳時代前～中期

所在地 那珂川町片縄字井河



個人の住宅建設及び、片縄小学校建築に先だって、古墳9基を調査しました。その内8基(2～8号墳)は方墳で、木棺を埋葬施設としているもの、もう1基(1号墳)は円墳で石室を造るものでした。8基の方墳は、4世紀の後半代に次々に造られたと考えられ、平野を見下ろす東側のものが一番古く、西へいくに従って新しくなるようです。粘土に残された木棺の痕跡の中から鉄製の剣や工具類、玉が出土しました。一方、1号墳は直径18mの円墳で、その中心に2m×4mの石室を造っていました。石室は入口を開けさえすれば何度でも埋葬でき、木棺を使った古墳より新しい埋葬方法です。石室の中からは鈴釧を初め、釧、玉などの装飾品、剣や直刀などの武器が数多く出土しました。このような豊富な出土品からこの古墳は、当時の大豪族の墓と考えられます。5世紀後半頃造られたと推定されます。

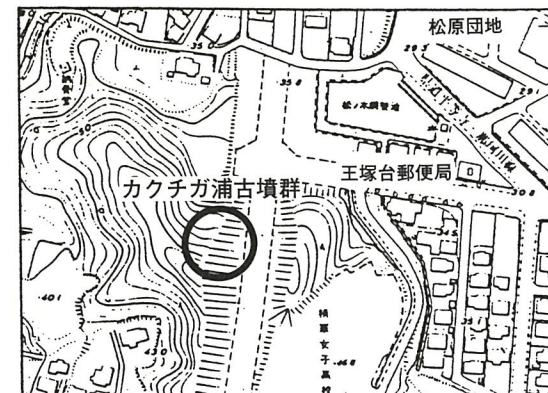


井河1号墳

カクチガ浦古墳群 (かクチがうらこふんぐん)

時期 古墳時代中～後期

所在地 那珂川町松木字カクチガ浦



都市計画道路建設に先だって古墳を13基調査しました。古墳の内部は横穴式石室という新しい埋葬方法が用いられています。6号墳の石室からは人骨が出土しており、鑑定の結果から30代の男性と成人女性2人が埋葬されていたことがわかりました。その他の出土品としては須恵器を初め玉や鉄鏃、工具といったものがあります。出土した須恵器から古墳群は5世紀中頃から営まれ始めたことがわかりました。ちょうどこの時期は石室がつくられ始めた時期でもあって、石室の変遷を知る上でも貴重な資料となりました。また、古墳群のなかでも10号墳は直径が25mとずば抜けて大きく、2段に築かれた墳丘の上段には土が流れないように石が葺かれていました。古墳の頂上から馬と家形の埴輪が出土していることからこの付近一帯の有力な豪族の墓であったことが伺えます。



カクチガ浦古墳群全景

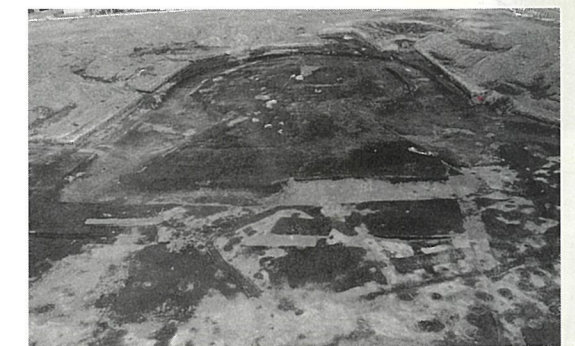
貝徳寺古墳 (けいとくじこふん)

時期 古墳時代中期

所在地 那珂川町今光字宗石



貝徳寺古墳は安德地区の土地区画整理事業に伴って調査しました。墳丘が大幅に削り取られていたこともあって古墳の存在は知られていませんでしたが、調査した結果、古墳の回りを巡る溝を確認できました。溝の形から古墳は前方後円墳で、全長54mを測る大きなものとわかりました。古墳の石室はすでに壊されてなくなっていました。溝の中から多量の埴輪片が出土しました。埴輪の出土はこの付近でも珍しく、人物や蓋、家、壺、円筒と種類も豊富で貴重な資料となりました。また、グリ石も多く出土していることから古墳が造られた当初の姿を想像すると、墳丘の回りに石を葺いて周囲を円筒埴輪で飾り、頂上に人物や家などの埴輪を置いたものと考えられます。本町と周辺の地域では那珂川を中心に前方後円墳が数多く造られていますが、本古墳のように平野部に造られることはまれで注目すべき発見となりました。

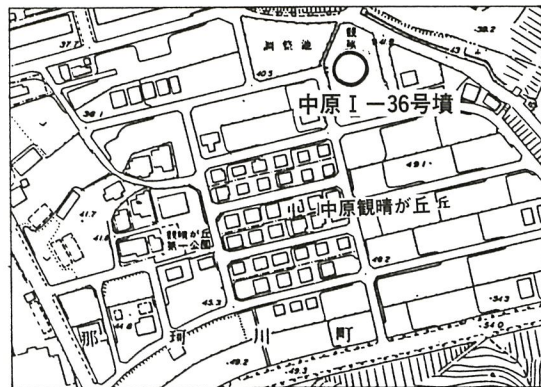


貝徳寺古墳

観音山古墳群 (かんのんやまこふんぐん)

時期 古墳時代後期

所在所 那珂川町中原字荒巻他



観音山古墳群は、本町の東にある観音山の山麓に散在している200基以上の古墳群を総称して呼んでいます。この古墳群での調査は主に字中原で、道路建設や区画整理に伴い、数次に渡って延べ119基を調査しました。この調査の中には一帯の長の墓である前方後円墳の発見とその調査が含まれ、大きな成果を上げました。調査したほとんどの古墳が後世の盗掘を受け、副葬品の大部分を失っていましたが、盗掘を免れた品々から当時の人々の生活やいろんな細工品の技術などを伺い知ることができました。また、古墳相互の関係など当時の村の構成や社会の様子を伺える資料も増加しており、今後研究を進めていく上でも貴重な成果が上がっています。

この古墳群のうち中原Ⅰ群-36号墳は石室が完全に残っており、開発者の理解とご協力により保存され、見学できるようになっています。



観音山中原Ⅰ群全景

平蔵遺跡 (へいぞういせき)

時期 鎌倉・室町時代

所在地 那珂川町下梶原字平蔵

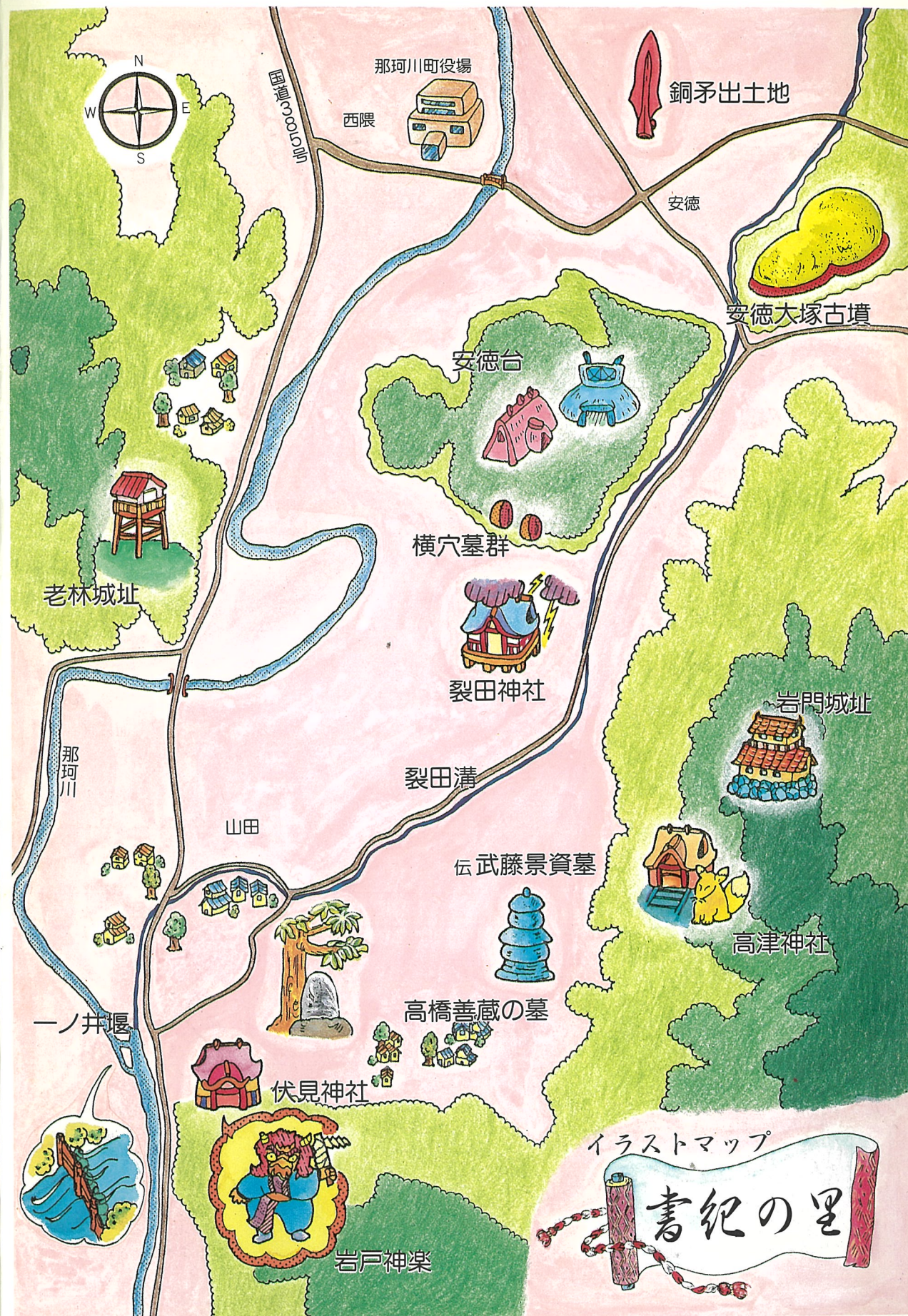


南中学校及び、周辺一帯に広がる遺跡群です。

発掘調査を行ったところ旧石器時代から鎌倉・室町時代まで、各時代の遺跡が重なり合った遺跡群であることが分かりました。時代の移り変わりと共に、この地は住居が立てられたり、お墓が営まれたりしていますが、最も重要なのが鎌倉・室町時代の遺跡です。この時代では、2m×3mの四角形をしたタタラの基礎部分が見つかり、注目を集めました。この他にも調査区の全面に亘って製鉄した跡や住居、倉庫の跡が多数あり、一大製鉄所であったことがわかりました。南中の造成前の調査では奈良時代の製鉄遺構が、平成1年に行った下梶原前遺跡では、更に古い飛鳥時代の製鉄工房跡が見つかっています。従って、梶原一帯は少なくとも飛鳥時代頃から盛んに製鉄が行われた処だったのでしょう。梶原という地名は「鍛冶原」からきているのかもしれません。



タタラ跡



このマップは安徳台周辺の遺跡や古跡をイラスト化したものです。

発 行 那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町
大字西隈64の1

発行日 平成2年12月1日

印 刷 (株)瞬報社写真印刷

